

(様式 1)

「絆の作り手育成プログラム研究指定校」実績報告書 (1年次)

1 【学校名等】

学 校 名	向日市立第5向陽小学校							校長名	野田 昌之	
所 在 地	〒617-0006 向日市上植野町五ノ坪1 電話 075-921-0001 FAX 075-921-0021									
学 年	1年	2年	3年	4年	5年	6年	特別支援	合 計	教職員数	
学 級 数	3	3	3	2	3	3	6	23	32	
児童生徒数	79	85	76	70	84	78	34	506		
連 携 先 (文化財所有者等)	向日市役所、向日市文化資料館、向日市文化財調査事務所、埋蔵文化財センター							※校長・教頭を含む		

2 研究校の概要

全教職員で、児童の実態を整理し、児童につけたい力を「自己有用感の高揚」とした。この力をつけることで、学習意欲の向上や学習の定着、生徒指導上の問題といった本校の課題解決に向けた基盤が盤石となると考えている。

令和2年度に行ったアンケート調査では、「わたしにはよいところがある」を肯定的にとらえる6年生児童の割合が55%で、「分からない」とこたえている割合が30%を示し、学年が上がるにつれて、肯定的にとらえる児童の割合が減少傾向の結果となっている。

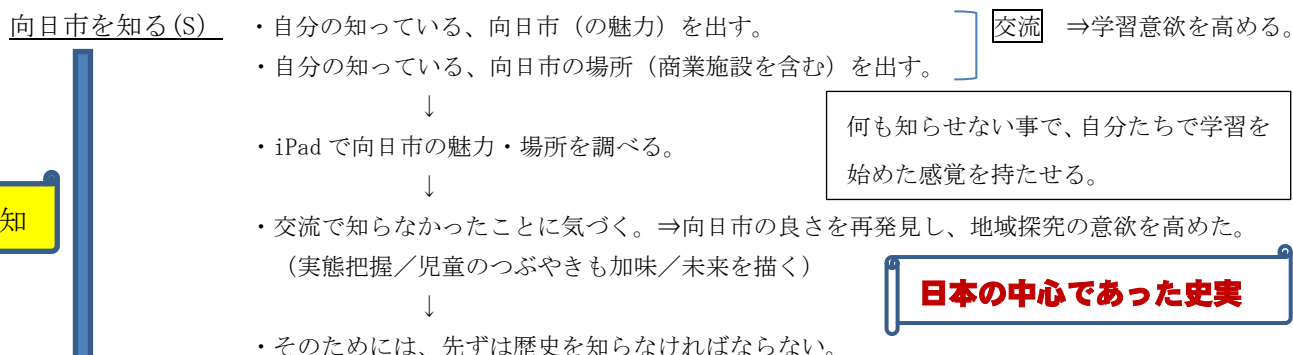
そのため、複数年をかけて、自尊感情・自己肯定感を高める取組を行うとともに、経年でアンケート調査等を行い、結果を考察することとしている。

3 主な研究活動

(1) 構想

- ・1年から6年まで、地域の学習として「向日市ふるさと学習」を生活科、総合的な学習の時間で進めている。特に6年生は、社会科の歴史と関連づけて、本指定を中心に位置づけて学習をしている。
- ・6年生の学習過程で大切にしたいこと
まなぶ・調べる・交わる→考える・まとめる・深める→伝える・やってみる
- ・6年生の学習目標 (ゴール)
 - ①課題解決型学習で提示された課題の解決策を思考することにとどまらず、考えた解決策を実行すること。
 - ②実行できる解決策を考え、考えたことが形になることで、地域の役に立つということを実感すること。

(2) 計画と経過



ここまで1学期

2学期：史実を知ること。特に向日市に関する事を知る。

(地域の歴史に興味・関心を膨らませるために、京都市と比較)

文化資料館見学

- ・文化資料館見学と同時に、朝堂院・大極殿も見学する。
- ・向日市のHPからアピールポイントを探す。

校区内の歴史(地蔵や灯籠)を夏休みに探す動機づけ

向日市広報担当の話

- ・市の観光戦略を担当している方(広報)に話を聞き、現状や困り感を聞く。
- ・向日市の歴史(文化)の中で、どこに焦点を当てるかを決めていく。→グループ分け

WS 目的や課題を明確にするため、今の知識量を確認する。

- ・歴史ウォッチングで見る視点を決める。
- ・向日市と京都市を比較する資料とする。
- ・第一回(高校生へ)の発表に向けて準備する。

社会科「歴史」と関連づけ

国語科「幸福論」と関連づけ

算数科『表関係』と関連づけ

京都市歴史ウォッチング

(学習を進める中で)

⇒「世界文化遺産」の文化財との出会いと地域文化財の実情を理解した。

ここまで2学期

⇒地域文化財が日本文化遺産にならないかを探ることを通して、文化財とその周辺事情(自然や人など)が一体となっていること(ストーリー性)が意味のあることであることを理解し、市の魅力をまとめていった。

高校生に発表※

- ・高校生からアドバイスをもらう。(内容についてもだが、発表の仕方等も高校生(大人)の視点で)
- ・小学生にアドバイスすることで、高校生の自己有用感が高まる。
- ・高校生の発表を3学期に見せてもらうことを伝える。
- ・高校生にとっては小学生(自分たちよりも年下)の目線で見えた向日市が分かる。

思

主

WS 課題の解決に向け、より知識を深め、より良い表現方法に気づく。

- ・高校生からのアドバイスを受けて発表の準備を進める。

国語科『書く』と関連づけ

高校生からの発表※

- ・高校生の発表を参考にして、自分たちの発表方法等を修正していく。
- ・高校生へのお礼の手紙を書く。

他学年に発表(G)

- ・向日市の広報担当の立場で発表する。5年生へ引き継ぐ
- ・3年計画の2年目に繋がられるような発表にする。
- ・2学期に話をして下さった方(市広報の方等)に見て頂く。
- ・文化資料館への作品展示を計画する。※

思

主

WS 本学習でつけた力、気づけたことを振り返る。

高校生との交流は、コロナ対応で中止。発表対象を校内の教員として、取り組んだ。

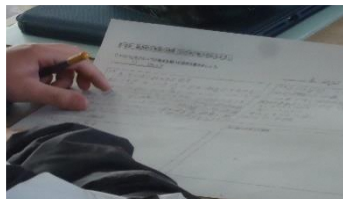
自分たちのできることを自覚し、実践する。

※高校生との交流、文化資料館への作品展示は実施できなかった。

4 今年度の研究の成果と検証

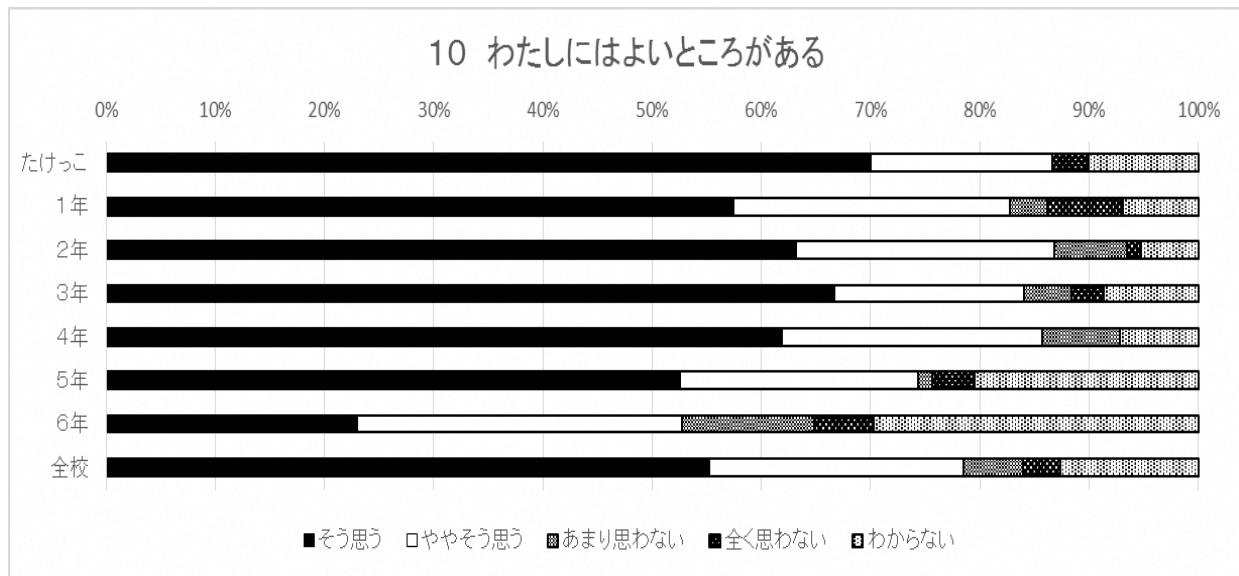


各グループで「向日市の魅力」をアピールするプレゼンテーション



聞き手は、各発表の良さを認めたり、気づいたことを書きまとめる。

<検証の概要> 【令和2年度学校アンケートの結果（一部）】



【令和3年度学校アンケートの結果（一部）】



上段のグラフは、令和2年度に行ったアンケート調査「10 わたしにはよいところがある」の結果である。5年時の「わたしにはよいところがある」を肯定的にとらえた回答が75%であった。

下段のグラフは、今年度の同アンケートの6年時の回答である。肯定的な回答が80%を超えており、5年時よりも増加した。また、昨年度の6年と比較しても30ポイント多くなっている。

このことから、学校での取組が効果をあげたと考えている。ただ、本指定での学習活動とともに、6年生では、継続して取り組んでいる人権学習の「ありがとうのはな」や一人一人の「強み」を捉える取組も行っており、あわせて自己肯定感の高揚につながっていると考える。
(児童の学習の振り返りから)

- ・友達と協力する力、失敗してもフォローできる力、まとめる力がついた。自分が困っているときに、みんな助けてくれて、みんなで作るって良いことだと感じた。

5 今年度の課題

- ・当初世界文化遺産への登録を目指すことを投げかけ、探求活動を進めたが、専門家（他市町の広報課）の話を聞く中で、指導者側が想定しない反応や内容を児童が知ることとなり、児童の興味関心を継続したり、課題設定を修正したりするのに苦慮した。
- ・校区のフィールドワークだけでは、歴史を感じにくいいため、今後も文化資料館や市内の関連する文化財の見学、フィールドワークを積極的に実施していく必要がある。

6 事業終了後の研究構想

- ・6年生だけの取組とならないように、各学年の「総合的な学習の時間」カリキュラムの改訂とともに、年度当初にカリキュラムを確認し共有する。
- ・児童が文化財を実感するためにも、校区内や向日市の文化財に関わる方との出会いや講話を設定して、連携をさらに強めていく必要がある。
- ・児童の実践力を発揮する場面設定まで至らなかったため、児童が考えた実践できる仕掛けづくりや実現可能な目標設定をしたい。